



学年団を訪ねて

笑い声の絶えない関係性の中で、 明確に共有した課題に挑む

おおたわら
栃木県立大田原高校 2021年度3学年団



学年団が直面した課題

- ◎1年次7月の模擬試験の結果が、近年まれに見るほどの芳しくない内容となり、特に英語の底上げが必要だった。
- ◎所属する教師の進学指導の経験に差があったため、学年団総がかりの生徒支援が求められた。

学校概要

校訓「質素堅実」の下、教育目標として掲げる「真剣に学習に取り組み、豊かな創造力と正しい判断力を養う」「心身を鍛練し、不屈の精神とたくましい実践力を養う」「自他を敬愛し、感謝の心と奉仕の態度を養う」「規律と責任を重んじ、共同・連帯の精神を養う」ことを目指す。活発な部活動、自主的な生徒会活動などとともに、85キロ強歩、寒稽古などの伝統行事を今に受け継ぐ。2019年度に、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、「志と科学的リテラシーを育む文理融合型課題研究の開発」をテーマとした教育活動を展開する。

設立 1902（明治35）年

形態 全日制／普通科／男子校

生徒数 1学年約240人

2022年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、東北大、宇都宮大、埼玉大、千葉大、名古屋大、国際教養大などに144人が合格。私立大は、上智大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ436人が合格。



模擬試験の結果が厳しくても、 明るく前向きな学年会議

2019年度、県内屈指の伝統校である栃木県立大田原高校は、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）として、新たな一歩を踏み出すことになった。そのため、SSH1期生となる19年度入学生に対しては、大きな期待が寄せられた。しかし、7月の模擬試験は、過去5年間で最低の結果に。中でも、英語の成績は危機的と言える状況だった。

だが、1学年主任の矢口一也^{かずや}先生は、悲観はしなかった。

「5月に全学年で行う、本校の伝統行事である85キロ強歩では、1年生も互いに声をかけ合い、多くの生徒が完歩を果たしました。結果的には、例年以上の完歩率だったのです。仲間を信頼し、励まし合うことができるこの生徒たちとなら、どんな困難もきつと乗り越えられるはずだと思います」

矢口先生は、学年団の教師と、英語の学習に特に力を入れようと目線合わせを行った。例年、理系学部の志望者が多く、数学、理科の学習に力を入れる同校だが、データや生徒の様子を踏まえて、英語の指導を重視したいと明確に指針を発信したのだ。また、SSHのテーマを「志と科学的リテラシーを育む文

理融合型課題研究の開発」とし、海外の高校と連携したり、課題研究の成果を英語でまとめたりする計画もある中で、生徒の英語力の伸長は、避けては通れない課題だという共通認識があった。そのため、学年団の目線はそろいやすかった。

模擬試験の結果は厳しかったが、学年団は皆前向きだったと矢口先生は振り返る。

「模擬試験の結果の分析を担当した加藤信行先生は、学年会議では、とにかくよかったところを挙げていました。3教科総合の結果は芳しくないのに、『この大問の正答率が高いです』『この単元は前回の模擬試験より得点率が上がりました』などと、よく見つけてくるなど感心するくらい、前向きに結果を評価していました。そして最後は、『先生方、この調子で頑張ってください』と笑顔で締め、全員が爆笑。加藤先生のおかげで、『まづいな』という不安が『何とかなる』という希望に変わりました」

当の加藤先生は、「内心は危機感でいっぱいだった」と打ち明ける。

「このままではまずいなとは確かに思っていました。しかし、先生方に対して危機感をおおりにすぎると、課題の量をやみくもに増やし、それをこなせない生徒を、『勉強しない生徒が悪い』と見放してしまうような悪い回



リーダーに聞く！ 5つのQ&A

Q どのようなチームを目指しましたか？

A 楽しく一緒に仕事をしていく中で、互いの信頼感が高まっていくようなチームです。

Q リーダーとして心がけていることは？

A まずは学年団の先生方が持つ、それぞれの強みをしっかり把握することに努めました。そして、具体的なアクションの場面では、自分が前面には出ず、先生方にリーダーになっていただき、権限も委譲するようにしました。

Q 学年団としての「成功」は？

A 生徒はもちろん、教師が成長することだと思います。例えば、初めて担任を務めた若い先生が、自信を持って教育を語ることができるようになることも、成功の1つです。

Q リーダーとして自覚する長所は何ですか？

A メンバーの気持ちを理解したり、場の空気を読んで調整したりする力だと思います。

Q リーダーとして自覚する短所は何ですか？

A 怒りの感情を表すのが苦手です。特に、同僚に対して怒りの感情を表さざるを得なかった時、「あれでよかったのだろうか」と、何日も悩んでしまったことがあります。

路に陥りかねません。担当教科では、どの層に、どういった指導が必要なのかを、先生方自身が前向きに考えられるような模擬試験の結果の共有の場をつくることに努めました」

この3年間、学年団の会議から笑い声が絶えることはなかった。赴任した20年度から矢口学年団に加わった瀬尾明久先生は、「年度最初の会議で笑いが起きるなんて、珍しい学校だな」と驚いたという。

「進学校の勤務は初めてでしたので、最初の学年団の会議にも緊張して参加しましたが、他の先生方の笑い声で気持ちが悪くなりましたし、そんな明るい学年団であることがとてもうれしかったです。学年団の雰囲気、早く自分も溶け込みたいと思いました」

教科・クラスを超えて、 真のチームとして生徒を育てる

2年生になっても模擬試験の結果に好転の兆しは見られず、英語は苦戦を続けていた。そんな中、初めての担任を務めながら、英語科主任の重責を担っていた田野辺俊介先生は、数学科の大金孝也先生と理科の加藤先生から、「数学と理科の補習の時間を、英語の補習の時間に回そうか？」と声をかけられた。「伝統的に理数教科を重視する本校で、そうした言葉をかけてもらえたことは驚きでし

たし、ありがたかったです。自分は学年団というチームの一員なんだと感じました」

実は大金先生は、矢口先生から「担任と英語科主任の2つの大役を初めて担う田野辺先生を支えてほしい」と頼まれていた。それもあって、常に田野辺先生とコミュニケーションを取っていたから、補習の時間を正しく面切って提案できたと、大金先生は語る。

「担当の数学の授業の時にも、『英語の学習時間もちゃんと確保しているか？』と、生徒によく声をかけていましたし、加藤先生と相談して自分たちの担当教科の補習の時間を田野辺先生に預けることにした時も、『絶対に

英語の成績を上げてよ！』と、笑顔で田野辺先生に発破をかけました。田野辺先生も、『分かりました！』と笑顔で返してくれました」

進学校での指導経験の少ない担任・副担任を学年団全体でサポートするために大金先生が企画したのが、チューター制度だ。

「1人の生徒の進路・学習面を複数の教師で支援することができるよう、生徒が日頃からクラス担任以外の教師とも話せる仕組みをつくろうと考えました。実験的に、2年次の2学期に、担任をしていない生徒と面談を行い、3年次からは学年団全体の取り組みにしたいと、矢口先生に提案しました」

矢口先生は大金先生の提案を快諾し、3学年団の12人の正副担任は、担任をしているクラスを超えて生徒との面談を開始した。クラス担任の1人、金子ゆみ先生は、「学年団の先生同士で、面談した生徒の数を楽しく競い合っていた」と振り返る。

「加藤先生が、『私は今週3人の生徒と面談をしましたよ。金子先生は何人？』と、自慢気に言うのです。私も負けるものかと、空き時間を使って生徒と面談をしました」

初めて進学校で担任を務めた瀬尾先生も、「担任1人で抱え込まず、いろいろな先生のサポートを得ながら生徒を支援していけばよいと安心できた」と振り返る。

金子先生は、チューター制度は学年団の信



写真 矢口学年の卒業記念に生徒に配布した、学年団の担任の似顔絵が印刷されたクリアファイル。その似顔絵は、学年通信などでも度々登場し、生徒に「先生たちはチームだ」と印象づけた。



学年団を訪ねて



3 学年担任・英語科主任
田野辺俊介 たのべ・しゅんすけ
教職歴 5 年。同校に赴任して 5 年目。
英語科。



3 学年担任・特別活動部副部長
瀬尾明久 せお・あきひさ
教職歴 19 年。同校に赴任して 2 年目。
理科。



3 学年担任・進路指導部・SSH 部副部長
加藤信行 かとう・のぶゆき
教職歴 12 年。同校に赴任して 7 年目。
理科。



3 学年担任・進路指導部・教務部副部長
大金孝也 おおがね・たかや
教職歴 16 年。同校に赴任して 11 年目。
数学科。



3 学年副主任・担任
金子ゆみ かねこ・ゆみ
教職歴 30 年。同校に赴任して 4 年目。
国語科。



3 学年主任・担任
矢口一也 やぐち・かずや
教職歴 28 年。同校に赴任して 4 年目。
数学科。

頼関係があったからこそ成り立ったと語る。
「クラスの枠を超えて生徒と面談を行う中で私たちが心がけたのは、生徒に多様な視点で提示しながら、学年団としての方針はぶれないようにしたこと。チューターの教師は、生徒との面談の内容を、その生徒の担任に報告するようにしていました。そうした情報共有があったからこそ、私も生徒に自信を持って思いを伝えることができましたし、面談した生徒が、『〇〇先生からも同じことを言われました』と話すことが何度もありました」
担任をしていないクラスの生徒と面談する際は、事前にどんな生徒なのかを担当にヒアリングする(加藤先生の取り組み)など、チューター制度は、学年団の教師のコミュニケーションをさらに活性化させる効果もあった。
加藤先生は、矢口学年団の3年間を「教師も自走していた」と振り返る。
『「学年主任の船に乗る」と言われますが、矢口先生の操る船にただじっと乗っているという感覚はなかったと思います。矢口先生の方を見ながらも、教師一人ひとりが自分の考えで動いていました。それができたのは、学年団の中に密なコミュニケーションがあったからだだと思います」
22 年度大学入試において生徒たちが収めた成果は、国公立大学の現役合格者数が同校史

* 学年団 輝きのポイント *

- * 英語の学力の向上を学年団全体の重点課題としたことで、英語の補習の時間を他教科が融通するなど、協力体制が構築された
- * 学年団全体で生徒を支援し、教師同士の連携を強化するチューター制度を導入

上 3 番目の多さ、そして、現役合格率が過去最高という輝かしいものだった。懸案だった英語も、多くの生徒が、大学入学共通テストで教師の予想を超える好成績を残した。
「大学合格実績以上に私が誇りたいのは、3 年生になった生徒たちから、『受験は団体戦だ』という声が何度も聞こえてきたこと、そして、同じクラスの仲間の合格の知らせを、我が事のように喜び、ガッツポーズをする生徒たちの姿を見ることができたことです」(矢口先生)
学年団の教師たちの熱量とチームワークは、生徒たちをも 1 つにしたのだ。

※プロフィールは、2022 年 3 月時点のものです。